好きって言えない

御堂志生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
好きって言えない

【Ｎコード】
Ｎ８６７８Ｎ

【作者名】
御堂志生

【あらすじ】
「月は何でも知っている」シリーズ２作目／テーマ「合コン」／婚約してるのに素直になれない私って…

（前書き）

２００９年１２月、ジョルダンさん「読書の時間」投稿作品です。
おかげさまで予選・決勝とも１位になりました。

「だから、もうここでいいから下ろしてよ！」
「今無理したら、一生引き摺ることになるよ。それでもいいのかい、美希ちゃん？」

さっきから何回同じことを繰り返してるか……もう、ほっといてよ！　と言いたいけど、とりあえず黙るしかないみたい。
だって右足首がマジで痛かった。ホント情けなくて、穴があったら、いや、無くても掘って埋まりたい気分。

今夜の私は、いつもに比べたら驚くほど派手な格好だった。自宅から電車で3駅、県庁所在地である隣の市まで来て……何やってるんだろ。金曜の夜にオトコに背負われて、駅前の大通りを歩かなきゃならないなんて。しかも、手にはロングブーツを抱えて……。
すれ違う全員が笑ってる気がする。

「だいたいね、君の足でこんな高いヒールは無理なんだって」
「うるさいなぁ、もう。しょうがないでしょ？　このカッコでスニーカーが履けると思う？」
「ジングルベルが聞こえる時期に、何が楽しくてそんな短いスカートを穿くのか……判らないなぁ」
「オジサンには一生わかんないかもね！」

この時期、ミニスカートにロングブーツは定番でしょ。
オシャレしたら悪いって言うの？　いくら婚約者ったって関係ないわよ。
そう、このオトコ・神崎望（かんざきのぞむ）は私の婚約者なのだ。3ヶ月前にお見

合いして……なーんとなく決まっちゃってた。

「３４はオジサンじゃないぞ」

「２２の私には、完璧にオジサンです！」

「そのオジサンと来春には結婚するんだけどね。判ってる？」

「判ってるわよぉ」

「結婚したら、合コンは禁止だからね。それも判ってる？」

「う……」

だって……私、遠野美希（とおのみき）の勤務先は地元の大型スーパーなのだ。サービス業で一番忙しいのが日曜祭日。当然、休みなんか取れるわけがない。

逆に、日曜が休みの彼は精神科の医者で、クリニックとデイケアセンターを経営している。

――と、言ったら、同僚は“玉の輿”なんて騒いでたけど、とんでもない！

儲けは二の次って人だし、自分の時間を犠牲にしてまで在宅高齢者を預かって面倒を見ている変わり者だ。

「へえ～立派な人なんだね」

他人事ならね。私は結婚しても手伝うつもりなんかないから、って言ってある。

「ひっどーい！　ふられるよ、美希ちゃん」

別に構わないもの。あっちが結婚したいって言ったんだし。一回りも離れてるんだよ……当然じゃない。

彼の仕事に文句を言う気はない。でもっ！　毎回ドタキャンされるこっちの身にもなってよ。しかも、たまのデートは面倒な結婚の準備ばっかり。

今日の休みは絶対に普通のデートをしよう。そう約束したのに…

…。
デート中に患者さんからの電話で婚約者を1時間も放置する？
彼を置き去りにして家に帰った時メールが来た……『合コンのメンバーが足りなくて』
それでも一応「合コンに誘われちゃった！」って電話したんだけどね。……まだ話中、コレってどうよ。

その瞬間、私は思いっきりオシャレして合コンに行こうって決めた。

☆

『3番が5番にキス！』
え？　と思ったときには王様ゲームが始まってて、私は5番のカードを持っていた。

そこは駅前の居酒屋さんの2階だった。1階は普通にテーブルとか桟敷があって、2階は何個かに仕切られてた。それってちょっとした個室気分。

女の子はみんな職場の同僚で、私が婚約してることは知ってる。
「相手は公務員なのよねぇ。この不況に貴重じゃない？」ってことらしい。

でもキスって聞いてないわよっ！
地元の大学を出て市役所勤めっていう3番の男が、口を突き出して近づいてくる。ヤダッ、と思った瞬間、私はソイツを突き飛ばしちゃった。

シーンと静まり返って……。私はバッグを掴んで駆け出そうとした、その時。

「美希ちゃん！　どうしたんだ！？」

我が婚約者殿の顔に気を取られ……なんと段差で私は見事にスッ転んだのだった。

この店に入ってすぐ“合コン中”ってメールを送った。わざわざ店の名前も書いて……彼を試したバチが当たった気がする。

ブーツのヒールは折れるし、足首は捻挫するし……もう最悪。

☆

「美希ちゃんはさ、学生時代にスケートで靭帯やってるんだから。見合いの時も痺れ切らして、転んで捻挫したの覚えてる？」

「あれはっ！　そっちが急に入って来るからでしょ？　っていうか、2時間半も遅刻するほうがゼッタイ悪い！」

そうだ。あの時だって、デイケアのお年寄りが病院を抜け出した……とか言って遅れて来たのだ。

「美希ちゃん」

私は返事もしないでムスッとしていた。

彼の目の前で転んだせいで、色んなタイミングを外した気がする。

「そう怒らないで」

「怒ってない！」

と言いつつ、声はカンペキに怒ってると思う。

「ゴメンな。いっつも我慢してもらって。僕が結婚申し込んだのに、面倒なことは全部任せちゃって」
先に謝るのはズルイ。
ホントは来てくれて嬉しかったって言いたいのに……言えなくなる。

「ねぇなんで？　なんで私に結婚申し込んだの？　私じゃ病院の役にも立たないし……」
「じゃあなんで美希ちゃんは受けたの？」
「それは……」
質問に質問で返さないでよぉ。
「ゴメンゴメン。でも、決まってるじゃないか」
「何が？」
「結婚を申し込む理由は、好きだから、だろ？　君に嫁さんになって欲しかったんだ。資格や仕事で決めるなら、どこかの病院の前で『花嫁募集』のプラカードでも掲げるよ」

ダメだ。
こいつは精神科のドクターで人の心は専門なんだ。
判っててても、胸にジーンときて、ついつい口にしちゃう。後悔するかもなぁ。

「――手伝ってもいいよ」
「何を？」
「センターのお手伝い。あ、でも仕事は辞めないからね。休みの日だけね」
「無理しなくていいよ」
「別に……無理だと思ったらすぐにやめるし……」

メチャクチャ寒かったから……だから、彼の首にぎゅっと抱きつ

いちゃったんだと思う。おんぶして貰うのなんて初めてだったし。
彼は急に立ち止まって振り返った。そして、最初に逢った時とおんなじ笑顔を見せてくれたのだった。

「足、かなり痛い？」
「そうでもないけど……どうして？」
「じゃあ……ちょっと休憩して行こうか」
と言いながらクルッと方角を変える。すると目の前に『休憩1時間３２８０円、宿泊５８８０円～』の看板が……コ、コレって……泊まったほうがオトクじゃない？
いや違うってば。
「は、はいるのぉ？」
「イヤかな？」

実はコレもイライラしてた原因の一つなんだよね。
プロポーズしながら、全然誘ってくれないんだもん。

「私……経験ないよ」
「知ってる」
なんでよっ！　と叫ぼうとしてやめた。
今更だけど……とりあえず言っておこう。
「せ、責任とってよね」
「――了解」

クスクス笑う彼の首を、私はもう一回ギュッとして……二人して“オトク”なほうを選んだのだった。

～ｆｉｎ～

（後書き）

御堂です。
ご覧いただきありがとうございます。
時系列的には、
「君に出逢うために」⇒「月は何でも知っている」⇒「月のウサギ」
⇒「好きって言えない」
になります。
よかったらご覧下さいm（＿＿）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8678n/

好きって言えない

2010年10月8日12時13分発行